

陶淵明「停雲」詩考

——友情論——

はじめに

『陶淵明集』諸本の開卷劈頭に、「停雲」と題する詩が置かれてある。小序を有し、一章八句、四章構成、という點、ないし首句中の二字をとって詩題とする點が、次の「時運」、「榮木」と共通することから、三篇同時期に制作されたものと考えられる。通説によれば、東晉の元興三年（四〇四）、作者淵明、四〇歳の作である。

ところで、この詩は「四言の佳唱、亦柴桑の絶調なり」（清・王夫之『古詩評選』卷二）とまで稱賛され、古來、高い評價が與えられてきた。しかし、その一見平易な内容とは別に、作者の實作意圖については、論者の間で見解が分かれており、なぜ作者淵明はこの詩を作ったのか、また何を言おうとしているのか、という基本的な點は、なお検討の余地があるように思わ

れる。

本稿では、詩句の解釋を足がかりとして、その創作意圖について假説を提示してみたい。わずか一篇の作品解釋の問題であるが、ここには陶淵明の思想に關わる要點が示されているように思われるからである。

（一）詩の全文

はじめに、「停雲」詩の全文を示す。テキストは、汲古閣舊藏本⁽²⁾を底本とし、諸本間の異同のうち、重要なものは割注によって言及する。

停雲、思親友也。罇湛新醪、園列初榮。願言不從、歎息彌襟。停雲は、親友を思ふなり。罇に新醪を湛へ、園に初榮 列な

中國詩文論叢 第三十二集

る。願ひて言に従はず、歎息 襟に彌つ。

(1) 靄靄停雲

濛濛時雨

靄靄たる停雲

八表同昏

八表 同じく昏く

平路伊阻

平路 伊れ 阻まる

靜寄東軒

靜かに東軒に寄り

春醪獨撫

春醪 獨り撫す

良朋悠逸

良朋 悠逸たり

搔首延佇

首を搔いて延佇す

(2) 停雲靄靄

時雨濛濛

停雲 靄靄たり

八表同昏

八表 同じく昏く

平陸成江

平陸 江と成る

有酒有酒

酒有り 酒有り

閑飲東窗

閑かに東窗に飲む

願言懷人^{仁一作}

願ひて言に人を懷ふ

舟車靡從

舟車 從ふ靡し

(3) 東園之樹

枝條^{一作載紹興本} 榮 枝條 載めて榮ふ

競用新好^{一作朋新。一作競朋親好。曾集本同。焦本作競。朋親好、注云、宋本一作競用新好、非。}

競ひて新好を用て

以招^{一作怡余情} 以て余が情を招く

人亦有言 人も亦た言へる有り

日月于征 日月 于に征く、と

安得促席 安んぞ得ん 席を促して

說彼平生 彼の平生を説くを

(4) 翩翩飛鳥

息我庭柯 我が庭柯に息ふ

歛翮閑止 翮^{つばさ}を歛めて閑止し

好聲相和 好聲もて相ひ和す

豈無他人 豈に他人無からん

念子寔多 子を念ふこと寔に多し

願言不獲 願ひて言に獲ず

抱恨如何 恨みを抱くこと如何せん

詩序に「親友を思ふなり」とあるように、『詩經』の語句・構文を巧みに織り交ぜながら、「會えない友への思い」が切々と綴られている。第一章は、一人稱の語り手が、春の長雨に妨げられて、遠くの友と會えず、獨酌することをうたう。第二章もほぼ同趣旨。春の新酒がありながら、共に酌み交わすべき相

手がここにいないこと。第三章は、一轉、春の庭園の描寫へと移り、草木が榮え始める、初春の景をうたう。「促席」とは、席を近づけること。そして、最終章において、庭木に憩い鳴き交わす鳥が登場する。鳥は、「嚶として其れ鳴くは、其の友を求むるの聲、其れ彼の鳥の猶ほ友を求むるの聲」（『詩經』小雅「伐木」というように、『詩經』において友情のシンボルとされる）ことがある。鳥たちは樂しげに鳴き交わすのに對して、語り手は悠遠たる友（子）を思いつつ、「恨みを抱く」わけである――。

内容的には、會えない友人への友情の深さと、自らの孤獨をうたう、一篇の『抒情詩』と見なすことも可能ではある。だが、仔細に吟味してみると、不可解な點がいくつか認められるのも事實である。たとえば、第四章に「子を念ふ」とあるが、その「子」とはだれなのか？ またそれと關連して、本詩ははたして特定の人物へ贈った「贈答詩」であるのか。さらに、詩序を素直に信じれば、モチーフは「友情」（思親友）であると考えられるが、ではテーマ（趣旨）は何なのか。

このように、平明な内容のように見えて、内實はきわめて分りにくい作品となっており、「即時興懷の作」（清・吳崧『論陶』）というものではなく、かなり意匠を凝らした作品であると推測されるのである。そこで、まず「友情」をモチーフとする、前代および同時代の作品を概観し、本詩の位相を明らかに

陶淵明「停雲」詩考（井上）

しておこう。

（二）友情をうたう詩

本詩の第四章「子」については、①「張野・羊松齡諸人を指すだろう」（龔斌『陶淵明集校箋』）、②「古人を追想する」（清・查初白『初白庵詩評』）といった説が挙げられるが、いずれも確たる根據に基づくものではない。それゆえ、舊説の適否を検討することはさておき、①説の、「ある特定の人物に贈った贈答詩」という立場について檢證しておきたい。

友情をモチーフとする詩、すなわち、すでに存在する友情の確認と、その永續への期待をうたうことは、中國文學を特徴づける、大きな要素の一つであり、それは『詩經』以來の傳統を有するものである。だが、それらの実作がいかなる作詩状況においても普遍的に見られるかと云えば、必ずしもそうではなく、ジャンルの見た場合、六朝期においては、ほぼ二つのジャンルに集中すると言ってよい（モチーフにおける典型愛好性）。すなわち、『贈答』と『餞別』である。そして、留意したいのは、それらの詩題には通常、詩の受け手（讀者）の名が明示されるという點であろう。

いま試みに『文選』を閲すれば、『贈答』のジャンルに収められるものが69首あり、『餞別』の下には8首が収められている。このうち、受け手の名が詩題に明示されないのは、潘岳

中國詩文論叢 第三十二集

「金谷集作詩」⁽³⁾のみであり、他の76首はすべて明示されている。これは、考えてみれば、當然のことであって、「友情詩」たるものは、第一義的に、贈り先の友人を讀者とするものであるが（ある種手紙の如きもの）、それが公表され、第三者を讀者に取り込む際には、誰に向けて書かれたのかを示す必要があるからである。友情自體は、兩者間の個別的・私的なものであるけれども、それだけに兩者の關係性を第三者に明らかにしなければならず、それがまた讀者の作品理解を促すことにもなるだろう。實際、本詩を除く、淵明の贈答詩でも、「贈長沙公」・「酬丁柴桑」・「答龐參軍」のように、すべて贈り先が明記されている。もっとも、「贈答」と「餞別」以外にも、友情詩は作られており、そこには、詩題に友人の名を明記しない場合もないわけではない。たとえば――

思友人詩

西晉・曹摅

密雲翳陽景 密雲 陽景を翳ひ
霖潦淹庭除 霖潦 庭除を淹す
嚴霜彫翠草 嚴霜は翠草を彫ましめ
寒風振纖枯 寒風は纖枯を振はす。

凜凜天氣清	凜凜として	天氣 清く
落落卉木疎	落落として	卉木 疎なり
感時歌蟋蟀	時に感じては	「蟋蟀」を歌ひ
思賢詠白駒	賢を思ひては	「白駒」を詠ず
情隨玄陰滯	情は玄陰に隨ひて滯り	
心與迴飄俱	心は迴飄と俱なり	
思心何所懷	思心 何の懷ふ所ぞ	
懷我歐陽子	我が歐陽子を懷ふ	
精義測神奧	義を精しくするに神奧を測り	
清機發妙理	機を清ましむるに妙理を發す	
自我別旬朔	我 旬朔に別れし自り	
微言絕于耳	微言 耳に絶えたり	
褰裳不足難	裳を褰ぐるは難しとするに足らざるも	
清陽未可俟	清陽 俟つべからず	
延首出階檐	首を延ばして階檐に出で	
佇立増想似	佇立して増ます似たるを想ふ	

〔文選〕卷29「雜詩」上

曹摅のこの詩においては、詩題に「友人」としか記されず、具體的な姓名は明らかにされていない。しかし、本文中に「我歐陽子」とあり、第一次讀者（すなわち「友人」）が「歐陽建」であることが、第三者にとっても無理なく理解される。しかも、

「義を精しくするに神奥を測り、機を清ましむるに妙理を發す」と、相手（歐陽建）の具體的な人格が描かれており、これは本詩の重要なポイントと言ってよいだろう。つまり、友情詩が個別的・私的であるだけに、そこには表現の具體性が必要であることを示唆するわけである。

そうして見ると、「停雲」詩が、同時代の友情詩のなかで、かなり異質であることが自ずと了解されるであろう。少なくとも、これを贈答詩と見る限り、當時の作詩の慣例・禮儀から逸脱していることは認めざるをえない。よって、詩題に受け手の名が明記されないこと、詩中の二字を取って詩題とすること、文中に受け手（親友）についての具體的な記述も兩者の關係に關する情報もないこと等の點から「友情をモチーフとしながら」いわゆる贈答詩ではない可能性が高いと判斷されよう。そして、進めて言えば、これは特定の人物に向けて相互の友情の確認を企圖する詩ではなく、むしろ一般的・普遍的な見地から、「親友」について述べた作品であると考えられよう。この場合、第四章に見える「子」とは、現存する特定の人物でない以上、「古人」と見なすこともあるいは可能かもしれない。

そもそも、本詩全體に見える敍景句（風景描寫）そのものが、具體性を缺如しており、やや抽象的・觀念的、さらに言えば寓意・隱喩的である。これは、同じ連作詩と見なされる、「時運」「榮木」にも共通している點であり、連作詩三首を作成する際、

陶淵明「停雲」詩考（井上）

作者の發想次元で意圖したものと考えられる。具體性を排除することは、しかし、贈答詩にとって致命的である反面、抽象的・觀念的な哲學議論にとっては、効果的とも言えるだろう。その際、四言詩という詩型が、表現的適性を備えていることは、つとに松浦友久⁽⁴⁾氏の指摘するとおりである。

では、淵明は本詩において、どのような「理」を説こうとしたのだろうか。次に、この點を考えてみよう。

（三）本詩の「理」

本詩を通讀すると、第一、第二章が同趣旨の反復であるのに對して、第三章において、轉換もしくは屈折が見受けられる。それは絶句で謂うところの「轉」に當たるだろう。そのうち、前半四句「東園之樹、枝條載榮。競用新好、以招余情」はともかく、後半の「人亦有言、日月于征。安得促席、說彼平生」が論理的に分かりづらい。ここをどう解釋するかによって、本詩に對する理解は自ずと異なってくるように思われる。

第三章の後半四句について、我が國の先行譯注書類では、おむね次のように譯出されている、

ホンに世人も言うてをることであるが、月日といふものはいつもいつも過ぎ去ってゆくものだといふことで、ウカウカしておれば此の花もすぐ散ってしまふであらう。どうしたら、今の

中國詩文論叢 第三十二集

内に友だちを呼んで席をすませて一緒に昔話しをすることができよう。

（鈴木虎雄『陶淵明詩解』〔弘文堂書房〕）

次のような言葉もある。「歳月はただ過ぎ去るのみ」と。なんとかして、座席を近づけ合って、あの昔日のことを語りたいものだ。

（田部井文雄『陶淵明集全釋』〔明治書院〕）

* 傍點は、本稿筆者が加點した。

譯文に多少のニュアンスの違いはあるものの、「時間」は速やかに経過してゆく↓それゆえ、今のうちに友と會って話したい」ということで、「安得促席、説彼平生」の句を、作者の願望を表すものとして解釋する點は各書ほぼ一致している。實際、鈴木氏は「安得」に注して、「どうしたならばかくできるであろうかと希望することば」と解説している。

一方、現代中國の注釋書では、「安」を「如何」、「怎么」という疑問詞として、直譯するものが見受けられる。

人們时常言讲，太阳月亮运行不停。如何能与好友促席交談，尽情地傾吐生平？

（郭維森『陶淵明集全譯』〔貴州人民出版社〕）

人們不常这样说么，时间像人远行一样匆匆过去。怎么能和好

友在一个席上并坐，畅叙平生的志願。

（魏正申『陶淵明集譯注』〔文津出版社〕）

現代中國語の「怎么」は、疑問／反問、兩義的であるが、「如何」はふつう疑問であるので、「どうしたらできるだろうか」ということから、「願望」として解釋されるだろう。

しかしながら、實際のところ、この「安得」に、疑問や願望の意味があるとは考えにくい。たとえば、王雲路『六朝詩歌語詞研究』（黒龍江教育出版社、一九九九年）では、傅玄、陸機、陸雲等、晉代の詩に見える「安得・安能」の用例を検討した上で、「豈能」（どうしてできようか）という反問の意であって、六朝期の常用語と指摘している。この見解の正しさは、淵明自身の用例に照らしても明らかである。

結託善惡同 結託して善惡 同じ

安得不相語 安んぞ相ひ語げざるを得ん

（形影神・神釋）

園田日夢想 園田 日に夢想す

安得久離析 安んぞ久しく離析するを得ん

（乙巳歲三月、爲建威參軍、使都經錢溪）

つまり、三章の末尾二句は、「どうして『彼の平生を説く』

ことなどがありえようか？」という意味であって、否定の方をむしろ強調しているわけである。そうしてみると、「説彼平生」を「いっしょに昔話をする」と解釋する限り、友との交流を否定していることになるう。

ところで、この「説彼平生」を「昔話」と解釋する論者が多いことは既述のとおりであるが、はたしてそういう意味であろうか？ 陶詩において「彼」という指示代名詞は、以下のように共通する用法を持っているようである、

① 志彼・不舍 彼の「^お舍かざる」に志すも

安此日富 此の「日に富む」に安んず

(〔榮木〕)

② 彼・南阜者、名實舊矣。 彼の南阜なる者、名は實に舊し

(〔遊斜川〕序)

③ 中觴縱遙情 中觴 遙情を縱にし

忘彼千載憂 彼の「千載の憂」を忘る

(〔遊斜川〕)

④ 蔑彼・結駟 彼の「結駟」を蔑み

甘此灌園 此の灌園に甘んず

(〔扇上畫贊・於陵仲子〕)

陶淵明「停雲」詩考(井上)

このように、陶淵明において「彼」という代名詞は、距離の遠近を表すものではなく、自分と読み手雙方が了解している事物、世間周知のもの(かの有名な)を指しており、しかも③④のように、典故を「二字に略して」指す場合が多く見られる。そうであれば、ここの「平生」も、文字通りの「自分の若かりし頃」を指すものではないということになるう。淵明に先行する作品において、「平生」の典故と推測されるものは次の二つである。

A ……吾新失母兄之歡、意常悽切。女年十三、男年八歲、未及成人。況復多病。顧此悵悵。如何可言。今但願守陋巷、教養子孫。時與親舊敘闊、陳說平生、濁酒一盃、彈琴一曲。志願畢矣。

(〔文選〕卷43、魏・嵇康「與山巨源絕交書」)

B 子路問成人。子曰、「若臧武仲之知、公綽之不欲、卞莊子之勇、冉求之藝。文之以禮樂、亦可以爲成人矣。」曰、「今之成人者何必然？見利思義、見危授命、久要不忘平生之言、亦可以爲成人矣。」

(〔論語〕「憲問」)

Aは、自分を後任として推舉しようとする山濤（字、巨源）に對し、嵇康が、自分の本質を理解していないとして絶交を申し出たもので、該當部分は、仕官を斷る理由とともに、「市井に籠り、子孫を教育し、親戚舊友と舊交を溫め昔話をし、酒と音楽を楽しみたい」という自らの本願を述べたものである。

一方Bは、完成された人（成人）について、子路が孔子に尋ねたもので、「（今の成人は）利益を見ながら義を思い、危険を前にして命を投げ出し、少年の頃の約束を成長しても忘れない」と答えたもの。

A、Bともに著名なものであるが、丁福保『陶淵明詩箋注』以下、用例としてAを採用する注家が多い。⁽⁵⁾確かに、「陳說平生」の「說」という動詞は、本詩と一致するものではない。がしかし、Aの難點は、「說平生」が仕官の對極である、無官または閑適の「シンボル」として使用されていることであろう。つまり、單なる「昔話をする」というのではなく、その行爲が「官に就かない生活」を含意しているわけである。だとすれば、本詩第三章において、「安得」と、否定する以上、無官の生活はできない、どうして隱遁できようか、という意味になり、これは第一、二章に描かれる、閑適の暮らしの描寫と齟齬することになる。

逆にBであれば、少かりし頃の約束・言葉を守ることができない、あるいはできなかった、ということ、で、「憶ふ我少壯の

時、樂しみ無きも自ら欣豫す。猛志は四海に逸し、⁽⁶⁾翺を驚げて遠く翥ばんことを思ふ（憶我少壯時、無樂自欣豫。猛志逸四海、翺思遠翥）」（「雜詩」其五）といった、淵明自身の發言とも整合性がとれるであろう。そうしてみると、本詩に云う「彼の『平生』とは、『論語』の『平生の言を忘れない』實行すること」を指しており、その言「志を逐げることができなかった自らを振り返ったものではないか、と判斷されるのである。もっとも、それにはそれなりの理由・原因があるはずである。おそらく、それが前文の「日月于征」ということであろう。次にこの問題を考えてみたい。

(四)「日月于征」の解釋

ここまでの考證にもし大きな誤りがなければ、第三章後半の「安得促席、說彼平生」とは、「若かりし頃の志（約束）を實現できない」という意味になるだろうが、そうすると、前文の「日月于征」とは、どのような論理で結びつくのだろうか。「日月于征」とは、時間は流れてゆく、との意である。一方、「人亦有言」は、六朝詩に多用される表現で、すでにある詩句や諺語を引用（引喩）する場合がほとんどであり、作者自らが創作することは全くありえないとは言えないまでも、少ないことは事實である。もっとも、引用に際しては、原典の文章をそのまま用いることは形式上難しく、なんらかの加工を施すのが一般的

である。

「日月于征」については、從來、次に掲げる『詩經』からの引用と考えられてきた。

蟋蟀在堂 蟋蟀 堂に在り

歲聿其逝 歲 聿に其れ逝かん

今我不樂 今 我 樂しまずんば

日月其邁 日月 其れ邁かん

無已大康 大いに康しむ無かれ

職思其外 職はくは其の外を思へ

好樂無荒 好樂して荒ること無し

良士蹶蹶 良士 蹶蹶たり

(唐風「蟋蟀」第二章)

この詩は、小序によれば、「儉約でありながら禮に中らない晉の僖公を閔み、時に及んで禮を以て虞樂せんことを願った」詩である。『集傳』では、僖公ではなく、唐の習俗を刺したものとするが、農務の閒暇に及んで宴樂せよ、とする點では共通する。その該當箇所「日月其邁」は、本詩の「日月于征」と意味的には變わりがないため、押韻の關係上、「邁」を「征」に改めて用いたものと理解するわけである。たしかに、本詩が四言詩であることを考慮すれば、『詩經』の詩句を典故と見な

陶淵明「停雲」詩考（井上）

すことはある程度穩當ではある。

だが、問題は『詩經』の該當句が上句「今我不樂」に示されるように、行樂を勧める點である。年の瀬の今、樂しまなければ、日は過ぎ月は變わって新年を迎えることになるのだ、と。もし通説のように「說彼平生」が「友人と昔話をして樂しみたい」という趣旨であるなら、これは適切な典故と言えるだろう（時間が経つのは速いゆえに樂しまなければならぬ）が、「若かりし頃の志（約束）を實現できない」という意味だとすれば、論理的に結びつき難くなるだろうことは否めない。

では、本詩の「日月于征」は、どこから引用したものであるうか。時間の経過の速やかさを嘆く表現は、古來『詩經』以外にも數多く見られる。實際、六朝詩の「人亦有言」を調べると、その引用元は『漢書』『春秋左氏傳』など多岐に亘っており、どれか一つに特定することは難しい。そこで本稿では、一つの假説を提示しておきたい。次の文である。

陽貨欲見孔子。孔子不見。歸孔子豚。孔子時其亡也、而往拜之。遇諸塗。謂孔子曰、「來。予與爾言。」曰、「懷其寶而迷其邦、可謂仁乎？」曰、「不可。」「好從事而亟失時、可謂知乎？」曰、「不可。」「日月逝矣、歲不我與。」孔子曰、「諾。吾將仕矣。」

陽貨 孔子に見えんと欲す。孔子 見えず。孔子に豚を歸る。

中國詩文論叢 第三十二集

孔子 其の亡きを時として往きて之を拜す。塗に遇ふ。孔子に謂ひて曰く、「來たれ。予 爾と言はん。」曰く、「其の寶を懷きて其の邦を迷はず。仁と謂ふべきか？」曰く、「不可なり。」「事に従ふを好みて亟^{はや}しは時を失ふ。知と謂ふべきか？」曰く、「不可なり。」「日月 逝く、歳 我と與ならず。」孔子 曰く、「諾せり。吾 將に仕へんとす。」

『論語』「陽貨」

これは、著名なエピソードを数多くもつ『論語』のなかでも、特に知られたエピソードと言ってよい。クーデターによって魯國の政權を掌握した陽虎（字、貨）が孔子の名聲を耳にし、出仕を追ろうと會見を望んだが、孔子は決して會おうとはしなかった。そこで、虎は蒸し豚を孔子に贈る。孔子が返禮のために自分に會いに來るはず、と目論んだのである。孔子は虎の不在を狙って訪ねてゆく。が、運悪く、歸路でばったり虎と出くわしてしまふ。「來たれ、我 爾と言はん」、と言うなり、虎は孔子に對し、「才能を抱きながら國政に與らないのが仁者であろうか？政治に興味がありながら、そのタイミングを失うのが、知者であろうか？」と、仕官を勧める。そしてそれに續けて、虎の口から「詩のように美しいことば」が紡ぎだされる。それが、「日月 逝く、歳 我と與ならず」である。

本稿が「日月于征」の典故として『論語』のこの條を主張す

るのは、二つの理由による。

一つは、本詩との連作と見なされる、「時運」、「榮木」の二篇がともに、『論語』と關連をもつからである。「時運」詩は、「先進」篇の曾點の故事を踏まえたものであり、「榮木」詩は、「四十五十而無聞焉、斯亦不足畏也已矣」という、「子罕」篇の一條に言及する。つまり、この三篇が連作とするなら、創作の發想次元で『論語』が關與している可能性が考えられるわけである。

もう一つは、「日月逝矣」とともに見える「歲不我與」を典故とする表現が、陶詩にしばしば見えるからである。

及時當勉勵
歲月不待人
時に及んで當に勉勵すべし
歲月 人を待たず

〔雜詩十二首〕其二

日月擲人去
有志不獲騁
日月 人を擲ちて去り
志有るも騁するを獲ず

〔雜詩十二首〕其二

これは要するに、淵明がかねてから『論語』のこのエピソードおよび陽虎の言葉に對して強い關心を抱いていたことを示唆するものである。だとすれば、「停雲」詩の引用句「日月于征」が、「陽貨」篇のこの故事に由來すると考えても、さして

不自然ではあるまい。

さて、では陽虎の言葉「日月逝矣、歳不我與」とはいかなる意味であろうか？一般に「人生は短い（だから早く仕えなさい）」といった、「人生の有限性」という概念で理解されているが、どうもそうではないようである。前文の「好從事而亟失時」という表現から推測すると、「日月」も「歳」も、「時」、すなわち「然るべき時」＝人生のタイミングを指しているように思われる。つまり、本人の事情と關係なく、「時」は無情に通り返してゆくものだ、ということである。比喩的に言えば、「時」は先を急ぐ列車のようなもので、人が遅れて乗りこむのをわざわざ待ってはくれないということであろう。それゆえ、その「時」を逃してはいけないのだ、と。この理解は、淵明が、「時に及んで當に勉勵すべし」（「雜詩」其一）と言うのと符合する。こうして見ると、本詩の第三章後半四句の言わんとするところがある程度明確になってくるであろう。「人亦有言、日月于征。安得促席、說彼平生」とは、——「時は人を待たず無情に過ぎてゆく、という言葉のとおりだとすれば、孔子の言う『若い頃の言葉を守る』ことは困難である」ということである。平生の志を實現できるかどうかは、當人の意志の強さや努力に基づく場合も確かにあるだろうが、「時」と自分とのめぐりあわせに左右される場合も少なくない。時宜を得るか、逸するか

陶淵明「停雲」詩考（井上）

は、本人の努力でどうにもならないことがある。本詩の要點はおそらくここにあるだろう。

孔子は陽虎に説得され、「我 將に仕えんとす」と仕官を承諾した。陽虎の言葉はそれほど説得力をもっていたのである。一方の淵明は諸般の事情により、その「時」を逸することになり、「平生の言」を實現することができなかった。それは同時に、かつて志を同じくした舊友との離隔をもたらしことになる。物理的に離れているがゆえに、會いたくとも會えない、というわけではない。お互い進む途を異にしたがゆえに、袂を分かち、そしてそれゆえに友を思い續けるのである。最終句に「恨み＝回復不可能な既成事實」を抱く、とあるのはそのためである。

（五）結語

以上、陶淵明「停雲」を、抒情詩ではなく、説理の詩とする立場から、その詩句解釋を通して、本詩の主題について若干の考察を加えてきた。既述のように、本詩は從來、「春日に會えない友を想う」詩として、本文解釋の點でほとんど全く問題視されてこなかったため、本稿の考證はやや牽強附會の感は否めない。しかし、本詩が「時運」、「榮木」と連作だとする基本的な枠組みに従うなら、他の二篇がなんらかの「理」を説く以上、本詩だけが「情」を述べるものとは考えにくい。また、抒情詩であるなら、なぜ五言詩でなく、四言詩という様式を用いたの

か、が説明できないだろう。敢えて假説を提示した所以である。

最後に、本詩制作の動機もしくは背景について、私見を述べておきたい。先にもふれたように、友との離別という状況の下で、その不在感・喪失感を詩にうたう、という事例は古くから存在する。が、この時期、すなわち東晉時代、そうした激しい友情の念ばかりでなく、「約束したのに友が来ない」という、獨特な詩情が發掘されたことは、つとに識者の指摘するところである。道がないために友が現れない——という本詩の状況設定は、あるいはそうした同時代作品の影響を間接的に受けている可能性は指摘しておいてよいだろう。

しかし、より直接的かつ重要な影響をもたらしたものは、やはり『論語』ではあるまいか。周知のとおり、『論語』の巻頭「學而篇」は、「學んで時に之を習ふ、亦た説ばしからずや。朋有り遠方より來たる、亦た樂しからずや……」として、人生の喜びについての記述から始まる。そして、ここに「朋友」の項目が特記されていることは留意されてよい。『陶淵明集』の編集経緯については不明な點が少なくないが、その巻頭第一篇の「停雲」が同じく「朋友」について論じていることは、意味深長な一致と言わざるをえないだろう。

「朋有り遠方より來たる、亦た樂しからずや」と孔子は言い、一方、淵明は「願ひて言に従はず、歎息襟に彌つ」と言う。

両者は、正反對の結果を述べながら、「朋友の重要性」については價值觀を等しくしているのである。實際、孔子は、「己に如かざる者を友とする無かれ」（學而、「直きを友とし、諒（まこと）を友とし、多聞を友とするは、益なり」（季氏）、「賢友多きを樂しむは、益なり」（同）等、人の人生において、友がいかに大切かを繰り返して説いている。だが、そうであればあるほど、孔子あるいは儒家思想を尊重する者にとって、友の不在は人生論における切實な問題とならざるをえないであろう。

經世濟民の志を打ち捨て、隱逸を決意した淵明にとって、「友の不在」という問題が重くのしかかってきたことは想像に難くない。隱逸とは、世俗との交流を絶つものであるが、それはとりもなおさず、若き日、志を同じくした友を失うことをも意味するからである。本詩と同様、「獨酌」をうたった「雜詩」其二には、次のようにある——

欲言無予知	言はんと欲するも予に和する無く
揮杯勸孤影	杯を揮ひて孤影に勸む
日月擲人去	日月は人を擲て去り
有志不獲騁	志有るも騁するを獲ず
念此懷悲悽	此を念ひて悲悽を懷き
終曉不能靜	曉を終ふるまで靜まる能はず

人生の喜びを積極的になうたおうとする陶詩の側面に、「失志の悔恨」と「友の不在」が濃い影を落としていることが、改めて理解されよう。

【注】

(1) 本詩の創作意圖については、大別して二つの見解がある。一つは、「規諷の意」を假託したもの、とする説。

・此蓋元熙禪革之後、而靖節之親友、或有歷仕於宋者、故特思而賦詩、且以寓規諷之意焉。此章言「停雲」「時雨」、以喻宋武陰凝之盛、而微澤及物。「表昏」「路阻」、以喻天下皆屬於宋、而晉臣無可仕之道矣。……

(元・劉履『選詩補註』卷五)

・四首皆匡扶世道之熱腸、非但離索思羣之閒悵也。「八表同昏、平路伊阻」、「平陸成江」、日月山河、交失其恆、此復何等景象、可乏同心亟商匡扶哉。園樹雖凋、猶有再榮之日、世界雖壞、豈無再轉之手、所以朋愈邈而席愈思促也。……

(明・黃文煥『陶詩析義』卷一)

・詩人通過親友無由來、自己無從往、皆因交通阻塞而指明戰亂、併以不得見親友的激憤之情、表明了嚴峻時局和國家・人民危亡的深切關注、對百姓蒙難的無比同情。

(現代・魏正申『陶淵明集譯注』「文津出版社、一九九四年」)

陶淵明「停雲」詩考(井上)

本詩を晉宋の王朝交代という時局に關連づけ、當時の暗黒社會や、宋に仕えた親友を刺したものとみなすのである。もう一つは、「春日に友を思う」ことをうたったに過ぎず、憤りは無い、とするものである。

・劉履謂「元熙禪革後、或有親友仕於宋者、靖節賦此以諷」。詩中無其意。……

(清・蔣薰『陶淵明詩集』卷二)

・「停雲」・「時運」・「榮木」三篇、人指爲悲憤之作。……但前二篇神閑氣靜、頗自怡悅、絕無悲憤之意。即曰憾曰慨、亦不過思友春遊、即事興懷耳。……

(清・吳松『論陶』)

・「停雲」四章只思親友同飲不可得、託以起興、正如老杜「騎馬到階除」、待友不至之意。

(清・吳瞻泰『陶詩彙註』卷一)

なお、本詩の制作年代については、四十歳説が大勢を占めるが、溫洪隆『新譯 陶淵明集』(三民書局、二〇〇二年)が指摘するように、「榮木」詩の「四十無聞、斯不足畏」とは、『論語』「子罕篇」の「四十、五十而無聞焉」を簡略化したものであるから、40歳から50歳の間と考えてもさしたる問題はない。本稿は、歸田後、即ち四十二歳以後の作と考えた。

中國詩文論叢 第三十二集

- (2) 中國國家圖書館藏『陶淵明集』（北京圖書館出版社、二〇〇三年、中華再造善本・唐宋編・集部）を用いる。
- (3) 潘岳『金谷集作詩』は、石崇の、金谷の別荘で開かれた、崇と王詡の送別の集いに際して作られたもの。詩題にその兩名の名前は記されないが、本文中の最初と最後において、『王生和鼎實、石子鎮海沂。……投分寄石友、白首同所歸』と、二人の名が言及されている。
- (4) 四言詩の表現感覺・表現機能について、松浦友久『中國詩歌原論』（大修館書店、一九八六年）三〇三頁では、『四言詩は』漢語古典詩の歴史のなかで最も雅潤で規範的なものであると、理念的に考えられてきた。そして、その實作は、『朝廷の儀禮に關わる樂府樂章の主要詩型』であり、もう一つは『古代の『正しい』詩精神の復活が求められるような場合』と指摘する。本詩は、淵明が『古代の精神の復活』を企圖し、人生論の原理について考えたものと見たい。
- (5) 例外的に、田部井文雄・上田武『陶淵明集全釋』（明治書院、二〇〇一年）では、『平生』の語釋の項に、『論語』『憲問篇』の『久要不忘平生之言』を挙げている。
- (6) 朱熹『詩集傳』卷六『蟋蟀』の注に、『唐俗勤儉、故其民間終歲勞苦、不敢少休。及其歲晚務閒之時、乃敢相與燕飲爲樂』とある。
- (7) たとえば、陸機『贈馮文罽遷斥邱令』詩の「人亦有言、交道寔難」について、李善は、『漢書』卷八十三「朱博傳」からの引用と見る。また潘尼『贈司空掾安仁』の「人亦有言、人惡其上」は、『春秋左氏傳』成公十五年の條、「盜憎主人、民惡其上」を典故とする。
- (8) 白川靜『孔子傳』（中央公論社、一九九二年）35頁。本書は、陽虎の人物像について詳しい考察を行っている。
- (9) 陽虎の言葉は、戰國時代において廣く傳わり、屈原『離騷』の第一段にも、「汨余若將不及兮、恐年歲之不吾與」と見える。
- (10) 松浦友久『詩語の諸相——唐詩ノート』（研文出版、一九八一年）第一部「詩語としての『怨』と『恨』——閨怨詩を中心に」、參照。
- (11) 石川忠久「謝混と『遊西池』詩」（『櫻美林大學中國文學論叢』第八號、一九八二年）では、『遊西池』詩について、『來ぬ友を待つ夕暮の時を過ぐす。そこになんとも言えない、清らかさと、奥深さが漂う』として、その詩境を「たゆたいの美」と定義している。また、この詩境が、後の謝靈運「南樓中望所遲客」詩によって定型化し、「期不至」（期して至らず）というモチーフの作品が生み出されていた、と指摘する。なお、六朝以後の「期不至」詩については、紺野達也「『友』を待つ詩人——初盛唐期の園林における詩人の交遊について——」（『中國詩文論叢』第三十集、二〇一一年）に詳しい。